

基 調 講 演
抄 録

阪神・淡路大震災における動物救護について

市田 成勝 大震災動物救護メモリアル協議会 会長



早いものであの日から15年を迎えようとしています。死者約6,500名、重傷者10,683名、全壊家屋104,906棟、半壊144,274棟、全焼家屋7,036棟、に及んだ大震災、人間だけでなく動物たちも被災しました。犬4,300頭、猫5,000頭と推定されています。1月

20日総理府の要請により「兵庫県南部地震動物救援東京本部」が設立され、1月21日には(社)兵庫県獣医師会、(社)神戸市獣医師会、(社)日本動物福祉協会・阪神支部の3団体及び兵庫県、神戸市の指導、協力のもと「兵庫県南部地震動物救援本部」が設立されました。後にこの5団体が集まって、大震災動物救護メモリアル協議会を立ち上げて今日に至っています。震災当時わたくしは、神戸動物救護センターのセンター長として活動しておりました。まったく思いもしなかった出来事に遭い、茫然自失のなかから動物救護が始まったと思います。動物救護が始まると聞いて、第一に駆けつけてくれた獣医師の馬場先生の御指導には感謝しております。当時の獣医師会のメンバーの半数が半壊以上の損害を被っていました。従いまして神戸市動物管理センター内に救護センターを設立・運営するのは、半数の30名程度で行わなければなりません。突然のことで準備も資金もありませんので、あるものを使うしかありませんでした。西区農協の方からビニールハウスを貸してもらって来て、その方の指導のもとにシェルターを作りました。1月27日から救護センターがオープンすることがマスコミに流れますと、パニックに陥るほど今まで経験したことがないほどの状況になりました。応援に駆けつけてくれたボランティアの方々、他府県の獣医師会のメン

バーの方々、愛護団体の方々等と協力してセンターの運営に携わったから、何とか切り抜けられたと思っています。届いた救援物資をテントに運び込んだり、避難所にフードを運んだり、寒い冬の最中廊下でダンボールの上で寝たり、シェルターの綻びを治したり、動物たちの生活を少しでも良くするため、人間だってこれだけ驚いているのだから動物たちはもっと驚き戸惑っているに違いないと、必死にがんばってくれたと思います。動物たちの世話をするのはボランティアの人達、治療するのは獣医師達、それらを支援するのが地元の獣医師会や動物愛護団体で構成されている救援本部であると思っています。

我々の活動が支援されたのか義援金もたくさん集まり、時期も4月になり気温も上昇し、とても此のままでは居られなくなりました。そこで動物管理センターの上の方に空き地があったので、そこにプレハブ2階建3棟を建設し、新しいシェルターとしました。5月も半ばになって居ましたが、環境は劇的に良くなり、治療件数も激減しました。何か動物たちも生き生きして来た様に見えました。成犬、成猫譲渡にある程度の不安を持っていましたが、1,045頭の動物たちが、新しい飼い主に引き取られて行きました。これがもとになって、動物管理センターでは成犬譲渡も行われるようになりました。被災動物を救護するため(社)兵庫県獣医師会、(社)神戸市獣医師会、(社)日本動物福祉協会阪神支部が中心となって、延べ2万人以上のボランティアの支援を得て1年4ヶ月に及ぶ動物救護活動を行い、1,556頭の犬猫等を保護し、延べ8,000頭の動物に治療を施すなどの救護事業が行われました。これも皆様方の協力があればこそ出来たことだと深く感謝しております。

Animal Rescue in the Wake of the Great Hanshin-Awaji Earthquake

Shigekatsu ICHIDA Chairperson, The Great Earthquake Animal Rescue Memorial Association

Fifteen years have now passed since the day that fateful day in January 1995 when the Great Hanshin-Awaji Earthquake took the lives of approximately 6,500 people and seriously injured 10,683, while totally destroying 104,906 houses, partially destroying 144,274, and completely burning a further 7,036. In addition to people, many animals were killed or harmed by the earthquake, which is estimated to have claimed the lives of 4,300 dogs and 5,000 cats alone. On January 20, 1995, the Tokyo Headquarters of the Great Hanshin Earthquake Animal Rescue was established under the guidance of the Prime Minister's Office, and on January 21, the Great Hanshin Earthquake Animal Rescue Headquarters was established under the guidance and with the cooperation of three animal welfare-related organizations, namely, the Veterinary Association of Hyogo Prefecture, the Veterinary Association of Kobe City, and the Hanshin branch of the Japan Animal Welfare Society (JAWS), together with Hyogo Prefecture and Kobe City. Later these five organizations came together to set up the Great Earthquake Animal Rescue Memorial Association, which brings us up to the present.

At the time of the earthquake I was working as the Director of the Kobe Animal Rescue Center. In the face of that totally overwhelming and unexpected event, our animal rescue efforts began in the midst of a chaotic situation. I was extremely grateful for the guidance of Dr. Baba, a veterinarian who quickly came to the site upon hearing that the animal rescue effort was starting. At the time, around half of the members of the Veterinary Medical Association had suffered the partial destruction of their premises or worse. So we had to establish and operate a rescue center at the Kobe City Animal and Pet Management Center with about 30 members, which was about half of the full membership. It was a sudden emergency, so we didn't have any time to prepare or any financial resources to draw upon and we were forced to make use of whatever was available. We borrowed plastic greenhouses from the Nishi Ward Agricultural Cooperative and converted them into shelters by following their instructions. When the information that the rescue center would be open from January 27 was released, I was confronted with a situation I had never experienced before and this made me feel close to panicky. But we were able to overcome the situation because we operated the rescue center in cooperation with an army of volunteers who quickly came along to

support our efforts, including people from the veterinary medical associations of other prefectures and from animal welfare organizations. All of these people broke their backs trying to improve the lives of the animals in our care even a little, such as by carrying relief supplies to the tents, carrying food to shelters, mending any open seams in the shelters, and even sleeping on cardboard on the floors of corridors during the cold of winter. They did all this because they understood how petrified the rescued animals must have been since even the people were severely shocked. This Rescue Headquarters was constructed by the volunteers who took care of the animals, the veterinarians who treated them, and the local veterinary medical associations and animal welfare organizations that supported these efforts.

Because our activities were strongly supported by the public, we were able to gather a large number of monetary donations. But as April came around and with the temperature rising, we found we were unable to continue in the same way we had been operating from the beginning. Accordingly, since there was an empty space available near the Kobe City Animal and Pet Management Center, we constructed three 2-story prefabricated buildings for use as new shelters. When these facilities were completed in the middle of May, the shelter environment improved dramatically and the number of cases of animal treatment declined equally dramatically. Somehow the animals' spirits improved. We had a certain amount of anxiety about handing over adult dogs and cats to new owners, but we were able to find new homes for a total of 1,045 animals. From this time, the transfer of adult dogs came to be carried out at the Kobe City Animal and Pet Management Center. In order to rescue animals in need, the Animal Rescue Headquarters and the Kobe City Animal and Pet Management Center, centered the Veterinary Association of Hyogo Prefecture, the Veterinary Association of Kobe City, and the Hanshin Branch of JAWS and with the support of over 20,000 volunteers, conducted animal rescue activities over a period of 16 months, took in 1,556 dogs and cats, and medically treated a total of approximately 8,000 animals. We deeply appreciate the enormous contributions made by so many people, as our activities could never have been carried out without their support and cooperation.

基 調 講 演
記 録 集

阪神・淡路大震災における動物救護について

Animal Rescue in the Wake of the Great Hanshin-Awaji Earthquake

市田 成勝 大震災動物救護メモリアル協議会 会長

Shigekatsu ICHIDA Chairperson, The Great Earthquake Animal Rescue Memorial Association



ただいま御紹介にあずかりました市田でございます。きょうは約15年もたつのかなと思うんですけども、早いもので、それぐらいの時間がたったように思います。

我々が、当時、本当に暗中模索というような状態から始めて、何とかそれを終わらせることができたという、約1年4カ月にわたる救護活動についてお話しさせていただきます。それでは、スライドをお願いします。

阪神・淡路大震災における 動物救護について

市田 成勝
(大震災動物救護メモリアル協議会会長)

【スライド1】



【スライド2】

これが、当時、この手前の救護センターの方から、これが淡路島でございますけれども、撮ったところでございます。今現在は、ここら辺に明石大橋が建設されております。震源地というのは、大体このあたりだろうというふうに言われているものでございます。三宮の方はこちらの方向という、こういうふうな地形から理解していただきたいと思っております。【スライド2】



【スライド3】

これは有名な灘のお酒、酒蔵ですね。こういうようにタンクとか、そういうのがあるんですけども、もう完全に破壊をされておるといふような状態でございます。

これも思い出したくないような光景でございますけれども、やはり地震でつぶれてきたということで、ここで何とかとどまっておるんですけども、嫌な思い出、その一つです。【スライド3】



【スライド4】

これは長田地区でございますけれども、約7,500棟ぐら이가焼失したということで、当時、テレビなんかを見ておりまして、消防士が水の出ないホースを持って立っておるといふような悲惨な状態でございますし、あの辺一帯が本当に焼け野原というふうな状況に陥ったところなんです。【スライド4】【スライド5】



【スライド5】



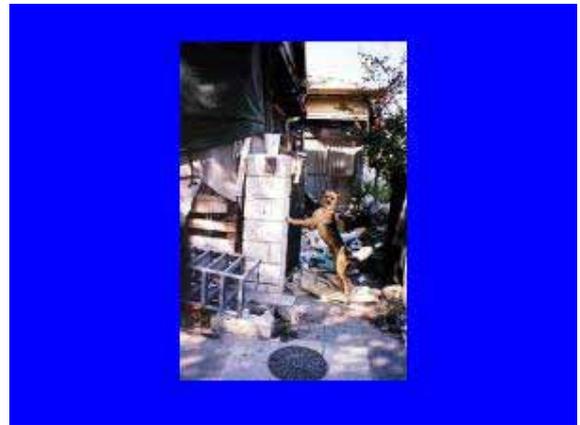
【スライド6】

これは、ここにある西市民病院ですね。神戸の医療の中核を担っている病院ですけれども、大体こういうふうな4階、5階、6階という、ここら辺のあたりが割とずばとつぶれてきてると。意外と、この上とか、この下とかというのはつぶれてなくて、あるいは歩道橋なんかも、余り倒壊とか、そういったことがなかったと。何か地震の専門家の言うには、それぞれの波長があるということで、阪神・淡路大震災の場合は、ここら辺がやっぱダメージを受けるような、そういう波長であったというふうな形で、当時、動物管理センターで執務されてた市の職員の方々も、日夜、その人間の方のケアに忙しかったと思います。【スライド6】



【スライド7】

これも震災なんかがあって、倒壊まではいってませんが、こういうふうに壁なんかはげ落ちてる。上から物も、こういうかわらとか、そういうものが落ちてくるといって、道路幅というのが、こういうことで約半分ぐらいになってしまうというふうな形ですね。だから、行けると思ってても、実際には、行ったら、もう途中で行けなくなってしまうというふうな形で、当時、会長であった旗谷先生なんかは獣医師会の会員さんの安否を気遣って神戸市内を歩き交った。そのときは何で行ったかと言いますと、オートバイなんです。普通の乗用車で行くと、とてもじゃないけど渋滞もありますし、こういうようなところは、とてもじゃないけど車なんかでは行けません。それから、ダメージのひどいところ、全壊だとか、焼失したとか、そういうところほど、当然のことながら連絡がとれないというふうな状態が当時多かったと思います。【スライド7】



【スライド8】

これは、わんちゃんがびっくりしたような顔でこちらをのぞいてるんですけども、おんなじように、こういうふうな被害はあるんだけど、こういうふうな雨露をしのぐことができるというふうなところで飼われてるというふうな形です。【スライド8】

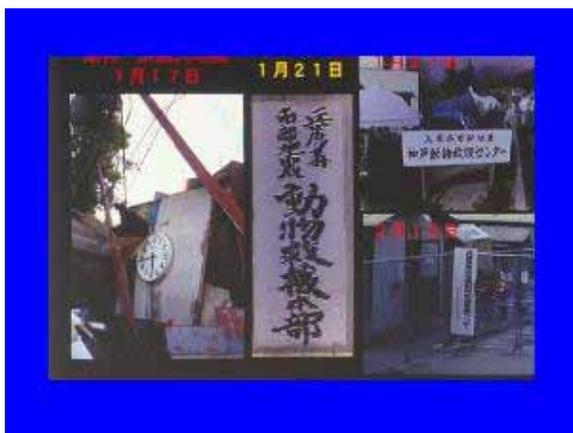


【スライド9】

これ、ちょっと見にくいんですけど、ここにわんちゃんがいるんですけど、これが避難所なんかに来たという

形のものです。

動物というのは、人間も動物なんで、初めのうちはお互いに、よく助かったな、よかった、よかったという話があるんですけども、やはりこういうようなところで、じつと3日、4日、1週間たってきますと、やっぱり、ここ私のとこというふうな形のテリトリー的なものがどうしても発生してくる。そうすると、動物好きな方ばかりじゃないんで、やはり、そこら辺でトラブルも出てくるというふうな形で、やはり、うまいこと住み分けというふうな形をとらないと、なかなか難しいこともあるということです。【スライド9】



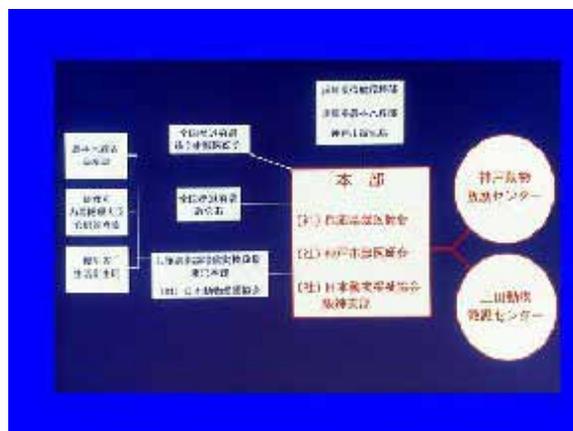
【スライド10】

そういう中で、この当日、1月17日、時刻はちょっとずれてるんですけど、5時46分ということなんですけども、こういうような形で。これは兵庫県南部地震動物救援本部という、俗に言う現地本部という形ものが1月21日にできたということで、これは我々が実際に知ったのは1月22日。神戸の場合にあって余り震災のダメージの少ないところ、西区だとか、垂水区、北区、須磨区の一部、まあ山側なんですけども、そういうところの先生方はダメージが少なかったということで、神戸市獣医師会の中で集まりまして、実はこういうものができたんだということで、神戸の場合は動物管理センター、北区にあるんですけども、その中に救援本部をつくと。県の方はどうするかということで、いろいろ検討されたみたいですけども、適当なところがなくて、三田ゴルフ場の隣の谷間になるんですけども、そこを造成して急遽つくったということで、神戸の場合は1月27日、三田の場合は2月16日にオープンしたというふうなことでございます。【スライド10】

これは一応、当時の組織図になります。読み方なんかもちょうと古くて、総理府とかというような形になってるんですけど、当時はそうだったというふうに理解してください。

これが東京本部ですね。財団法人の日本動物愛護協会

を代表にして、日本獣医師会、日本動物福祉協会、日本愛玩動物協会、それから、保護管理協会というのがメインになって、ほかの団体なんかも、賛同される方も支援をしていただいたということで、我々が、この時点じゃなくて、例えば新潟だとか、北海道だとかなんかで見てたんですけども、いわゆる現地本部がないと、ちょっともう話にもならないと、当然のことだと思いますけれども。我々の場合は、この社団法人の兵庫県獣医師会と神戸市獣医師会と日本動物福祉協会の阪神支部と、この民間の3団体が入って、そこに兵庫県と神戸市がアドバイザー的な形で参入されたということですね。当然、動物を救護するんですから救護センターをつくるということで、神戸動物救護センターの方は、神戸市獣医師会と日本動物福祉協会の阪神支部が主に運営すると。三田動物救護センターは、主に兵庫県獣医師会さんが担当するというふうな形でスタートしたということで、いろいろ我々もなれてなかったし、何をしたらいいかも本当にわからない中、東京本部なんかの支援も得て、何とかうまいこといけたということで、こういう中で、当初わからないときに川崎の馬場先生なんかに来ていただいて、あの先生は、湾岸戦争のときなんかも行かれた先生なので、なかなか指導していただいたということも非常にありがたかったということでございます。【スライド11】



【スライド11】



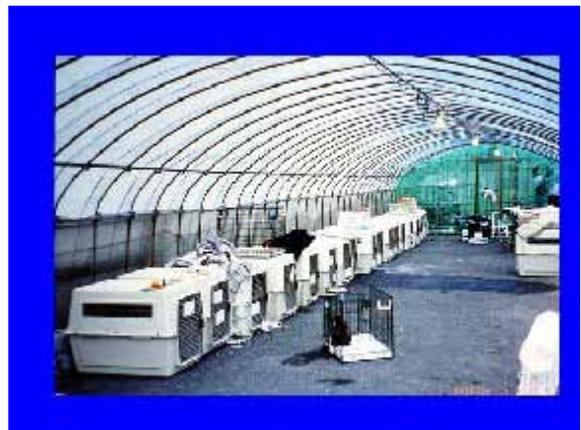
【スライド12】

これが神戸の大体の地図でございます。今言うた、西区、北区、須磨区、垂水区ですね。これが神戸救護センター、ここが三田救護センターということです。これが先ほど写真でお見せした、淡路島の大体震源地ぐらいだろうと。ここら辺に、今、明石大橋が建つてるといふような形で、実際にはこちらから来て、ここの、こういう感じにずっとこう、一番ダメージが大きいということですね。この、ここら辺がちょうど阪神高速が500メートルぐらいにわたって倒れたところですね。ここら辺が倒れたということです。ただ、余り写らなかつたんですけど、実際にはこちらの方も被害がかなりあって、怖いのは、やはり新幹線の橋げたも落ちてたということで、新幹線がもし新大阪から出てましたら、とんでもないことになってたのではないかなというふうな感じがします。神戸の場合の獣医師会のメンバーで言いますと、ここら辺の方は、大体全壊とか半壊とかという形です。当時、開業の先生は約70名ぐらいおられたんですけども、半分ぐらいが全壊、半壊、大体半分ぐらいが一部損壊というふうな形で行ったわけです。

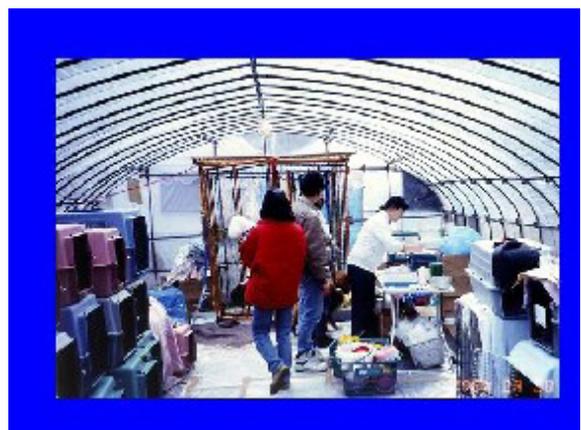
こういう模式図しかないんですけども、この神戸の救護センターに来るのは、こちら側の電車、神戸電鉄とか、阪急とか阪神、それからJRとかあるんですけど、全然だめなんですね。実際には、大阪の方から播但線、福知山線とかというのが来て、三田からこちらに、こう入ってくると、ここの救護センターに来るといふようなルートで大体来られてた。ところが、ここら辺はほとんど障害がないんですね。テレビに映ってるのは、この辺のが映ってるわけですけど、だから、あれ、何や、そんなに大したことないじゃないかということで、来て、動物はおるんだけどもというのが、初めのボランティアさんなんかの感想やったと思います。ボランティアの先生の先生が、それならばということで、夕方、動物の世話とか、そういうのが終わりました後に、じゃあ、下の方に行ってみましょうということで、ずっと車で行って案内していくと。それまでぎゃあぎゃあ、若い人なんかも多かったのと言ってたのが、ここら辺まで来ると、しーんとしてしまって、そのうち泣き始めてくるとかという、こんな感じなんですかという形。だから、ここら辺とこれから上とは、もう全然違うというふうな形が実際にございました。【スライド12】

これは実際にシェルターをつくり始めたところで、これはビニールハウスです。実際に、やっぱり準備というものが全くありませんでしたので、あるものでやるということで、これはたまたま、これやったらいけるんじゃないかということで、神戸にも、当時1人だけ大動物関

連の先生がおられまして、大動物というのは牛とか、鶏とか診る先生なんですけども、農協の方からこのビニールハウスを借りてきたということで、この指導のもとに我々が20人ぐらい集まりまして、このビニールハウスを建てたということでございます。ちょうどバリケンなんかも運び込まれてきて、またここに、これ猿なんですけども、これも保護された動物の一部でございます。下はこれ、まだ何も無いアスファルト、動物管理センターの中の道路に建てたわけなんですけれども、そういうふうな形です。この奥はちょっとグリーン色になってますけど、この奥が猫用のシェルターとして使おうかということで、これもゴルフの打ちっ放しの網ありますよね、あれが何か要らないかということなので、じゃあ、もらおうということで、もらってきつったという。とにかく、あるものでどないかしてカバーしていこうということが非常に大事なことであろうと思います。【スライド13】



【スライド13】



【スライド14】

これは、もう実際に稼働し始めたところです。あくまでも、このシェルター、これはもう緊急避難的なもので、永久的なものではございませんので、仕方がないというふうな形で、こういうような形で。なるべくケアをしていこうということで、当然ながら、朝と晩は最低限散歩だとか、そういったことをしていると。これは獣医さんな

んですけど、健康チェックというのはもう毎日毎日、朝晩やっておったということです。【スライド14】



【スライド15】

これは動物の世話の集めたものなんですけども、皆さん、一生懸命自分の気に入ったのだとか、扱えるようなものだとかという形で、日夜励んでいただいたということです。【スライド15】



【スライド16】

こういうふうな形で、例えば、動植物学園の方なんか来られましたら、シャンプーしたりとか、トリミングしたりとか、そういうようなこともしていただくし、なでてほしい、だっこしてほしいような犬はそれなりにするし、あんまりそういったことまでしてほしくないというふうな形はこういうふうな形で、自然となれるまで待つとかというふうな形で。どうしても、被災動物はかわいそうだからということで、例えば、だっこをすとか何とかということをして、もともとそういうことをされてない動物もおるわけなので、そういうのにしますと、がっぷりとやられてしまうというふうな形も時々ございましたし、かまれるときというのは、歯をむいて、うっとうなったら大体かまれないんですけども、大抵そういう動物はかまれない。ところが、非常にフレンドリーなんだけれども、小屋の中に入れた途端にがらっと変わるというふうなものに対して、非常にやっぱりかまれるということで、ひどい場合は、あの犬は注意しな

さいよと言ってたのが、さんざん説明して、それからシェルターの方に行って、1時間もせんうちに手をかまれて、使い物にならなくなって、そのまま帰っちゃったというふうなボランティアの方もおられましたので、そこら辺はちょっと、若干難しいものかなというふうに思いますし、我々がやった形のものではメインとしては犬とか猫とかいうふうな形のものでしたけども、例えば、それがカミツキガメだとか、毒蛇だとか、何かそういうふうな形のものというのは、実際には、難しいものであろうというふうには思います。【スライド16】



【スライド17】

これなんかは、天気のいいときにこういうふうにつないでいって、日光浴もさせるしという形ですね。来られたボランティアさんに説明なんかもしてると。これ、当時のうちの会長の旗谷先生なんですけども、よく、こういうふうな形でやっておられたということです。

【スライド17】

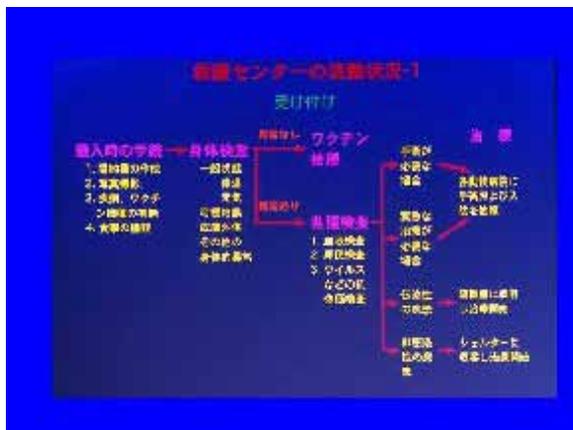


【スライド18】

これは小動物の治療、あるいは負傷してなくても入院というか、入所した場合に行ってきたということです。その治療風景なんですけれども、こういう形のもので、そろってるみたいに思うんですけども、結局、ここがそんなにスペースがないもので、ボランティアさんがここで治療をすると。治療が終わりましたら片づけて、

きれいにテーブルもふいて、食堂になるわけですね。食堂でボランティアさんが食べて、夜でしたら、そのまま今度は片づけをして、そこに寝床を敷いて寝るというふうな形です。だから、初期に来てくれたボランティアさんなんかは、そういうマットとか、そういったものがございませんでしたので、段ボールを下に敷いて、寝袋でその上に自分で寝た。私もそういったことはわからなかったので、1週間ほどしてから、ちょっとやっぱり寒いんだけど、どないかならんかと言われて初めて気がついて、どうしたんですかと言ったら、だから当時、あれは1月22、23日ぐらいでしたので、それはもう寒いですよ。

ただ、ラッキーやったのは、この動物管理センターの真ん前が防災センターだったんですね。防災センターにかけ合って、毛布が何かないかという話をしたら、第一声が返ってきたのが、動物の世話しとるの違うかと、何で毛布なんか要るねんという話だったので、動物は勝手に寝泊まりしてるわけじゃないと。当然、それはボランティアさんがいっぱいおるがなという話で、やっと、なるほど人間がおるんだというふうな話で、それから毛布だとか、いろんなものを援助していただいたというふうな経過がございまして、これ見るたびに、あのときは大変やったなというふうには思います。【スライド18】



【スライド19】

これが救護センターの受け入れの体制です。まず、動物が来ましたら、誓約書と写真撮影ですね。これが非常に、特に写真撮影というのは非常に大事なんですね。何でかという、連れてきた人が飼い主かどうかわからないんですね。親戚の方の場合だとか、親類の場合だとか、近所の人だとか、いろいろあって、一体だれが連れてきて、何してるんだと。あなたたち、ちゃんとした団体なのかというふうな形のこととも言われたことがございまして、そのときにこの写真を見せて、この人が連れてきましたと言ったら、その説明が要らないんですね。あっ、わかりましたということで。あるいは迷ってる犬とか猫

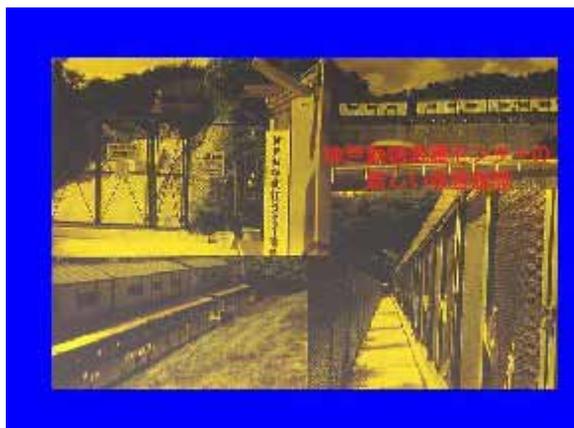
とかのこと、こういう犬、猫ありませんかというふうに来るんだけど、猫なんかでもそうなんですけど、猫の模様を口で、ここが黄色くて、あそこが白くてと言われたって、さっぱりわからへんのですね。やはり写真がぼんとあったら、1枚あっただけで、ああ、大体こんな猫なんだというのがわかるということで、入ってきたとき、それから、出ていくときというのはもう必ず写真を撮って、こういう人が連れてきた、連れて帰ったということを確認すると。それから、もちろん誓約書、これはもう飼い主さんが入れて飼い主さんが持って帰ろうと、新しい飼い主が見つかって持って帰ろうと、とにかく誓約書を書いて、ちゃんと飼うというふうな形のは交わしておいたということです。

それから、あとは疾病ワクチン、あるいは食事とかあるんですけど、要はどんなふうな飼い方をされてたのかというのが一番問題なところで、先ほど言った、必ずしも、どう言うんですか、甘やかされて、ちゃんと飼われてたわけじゃなくて、いわゆる番犬としておったと。朝晩は散歩させてもらって、えさはもらえるけども、そんなにフレンドリーなことをしてもらったこともないというのも結構あったんですね。それをやっぱり変にさわりまくと、がぶっと、こう来るというふうな形もありましたので、そういったことが本当は欲しかったということで、本当の飼い主の場合やったら、言うんですけども、やはり、こういうところへ来てどうですかと言ったときに、そんな変なことは余り言わないんですよ。だから、本当のところは、やっぱり、そこら辺も聞くべきであったかなとは思っています。

それから、そういったことで、とりあえずオーケーをされてきますと、先ほどのところに行って身体検査をしてみると。何も異常がなければ、そのままジステンバーのワクチン、あるいは、これは春になってからですけども、狂犬病のワクチンとか、そういった形のものをして、シェルターに受け入れると。何か異常のあるものは各種検査をします。簡単なものやったらセンターでできるんですけども、例えばレントゲンだとか、超音波だとか、当時、そういったことはセンターではできませんので、動物病院に收容するというふうな形です。手術が必要なのか、そうでないのか、あるいは伝染病なのか、そうじゃないのかというふうな形のもが一番の大事なことで、伝染病を持ってるとか、何かそういった形のは、そういった形で隔離して飼うということですね。手術が必要なときは、動物病院で手術をするということになります。

ただし、ボランティアだということで、普通の手術を

しても、ありがとうということで終わってたと。我々の心情としては、皆さんも、我々も動けると言っても、全然無償、病院だとか家が全然障害がなかったわけじゃなくて、かなりの損害があったということもかなりありますし、当時、4月ぐらいからは、やっぱり全壊、半壊した先生方にもお手伝いをしてもらったんで、そういった面からしますと、治療費ぐらいは、安いけれども払ってあげた方がよかったのではないかなと思うんですけども、これに関しては一切出さなかったというふうな形で行って来ました。【スライド19】



【スライド20】

これが新しいシェルターなんですけど、プレハブ、2階建てで3棟ということでございます。ここは実際に20メートルぐらい高いので、こういうふうな感じでほんと写ってるんですけど、たまたまあいてたので。実は神戸の場合、山一つが墓園になってまして、ここも墓園の中の一つなんですけれども、なぜかあいてたというふうな形で、そこにつくらせていただいたと。これは裏から見たところですね。2階が大体猫、この窓の一つぐらいが1部屋という形で、全部はなくて、五つぐらいが猫舎になっておりました。F I Vだとか、F E L Vを持っている子は、それなりに隔離した部屋ということになりますし、1階は、裏表こういうふうなパドック付きの犬舎になっております。これは表側の入るところですね。逃走防止用ということで、こういうふうな形のもの、あるいは転落防止用で、こういうふうな形のものを全部しておりました。【スライド20】

これが中から見たパドックですね。これはかなり広いし、砂の方がいいんじゃないかなということで、砂なんかを入れて、気性の合う子なんかを一緒に入れたりとか、どうしてもだめな場合には、1匹だけにはしたんですけど。かなり、どう言うのか、犬の方も人間さんの方も、こちら辺まで来ますと、かなり落ちついてきたということです。【スライド21】



【スライド21】



【スライド22】

これが2階の猫舎でございます。部屋の中には入るとは言うものの、やはり猫ちゃんの場合でも気の合うの合わないのありますので、こう入れておいて、気の合う子は全部出して、例えば1時間ぐらい遊ばせたら、また中に入れて、次の合う子なんかを出すという形で、ボランティアさんはほぼ1日くっついてて、そういうような世話をしてくれてたということです。

それから、この窓なんですけど、今の西側なので西日が当たって、冬はいいんですけど、夏はすごく暑かったので、当然、ここは写ってませんけど、エアコンがあって、換気扇もあるということで、この換気扇なんかも我々がつくったんですね。換気扇を取りつけて、このままじゃとてもじゃないけど危なくて、どう言うか、回せませんので、獣医師会の中にも器用な人があって、ここの窓の網をつけたり、こういうのをつくったりとかというふうな形で、かなり頑張ってくれたということです。

【スライド22】

これは診察室で、コンテナを入れて、下のところの、先ほどのところはちょっと距離が離れてますので、上に行って、こういうような簡易のもの。こちら辺まで来たときというのは、かなり落ちついてきてますので、そないにたくさん要らないということで、これぐらいで十分であろうということでございます。【スライド23】



【スライド 23】



【スライド 24】

収容されて、これは猫の異常ということで、一番はやっぱりこれなんです。下痢、嘔吐という形の消化器障害ということで、もちろんFVRとか、そういったものもございました。これは、一つはやはり、ほかの団体なんか猫なんかを扱って、FVRで目も鼻もぐちゃぐちゃのやつを、あんたと獣医さんがあるん違うかと、これ何とかしてくれへんかというふうな形で持ってこられたと。えらいの持ってきたなということでやって、その後なんか、やっぱり鼻水、くしゃみのものが大分ふえたということで、こちらもとんだ迷惑をこうむったというふうな形です。それから、意外と目の疾患も多かったということで、救護センターに来た人なんか言うのは、ここは空が青いですねと言うんですね。いや、空、きょうは晴れてますから青いですよと言ったんだけど、そうじゃなくて、下の方は、やはり半壊、全壊に近いようなものは、やっぱり家を崩しちゃうんですね。そしたら、土ぼこりが物すごく立って、水はまくんですけども、そんなじゃなくて、あっちでぼん、こっちでぼんという音がして、土煙が物すごいという形なので、そういうようなところにおりますと、当然呼吸器や目の疾患も多くなるだろうと思いますし、ちょうどこの阪神・淡路の前に宮城県沖地震ですか、があつて、そのときなんか救護された方がおっしゃってたのは、やはり消化器疾患が

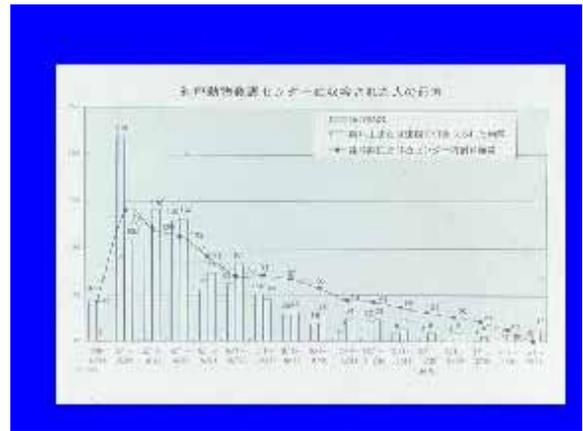
多かったというふうな形で、かなりのストレスがかかる、やっぱり消化器疾患というのは、かなり多くなるものかなというふうには思います。【スライド 24】



【スライド 25】

これは犬の方ですけども、やはり圧倒的に消化器疾患が多いということで、呼吸器疾患も多いんですけども、やはり、そういったストレスなり何なりというのは、相当こたえてくるのかなというふうには思います。

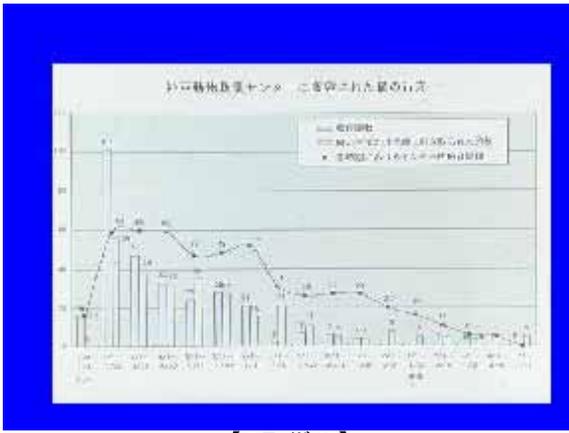
【スライド 25】



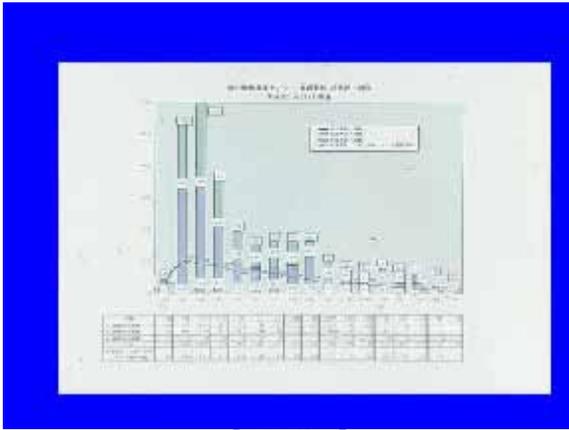
【スライド 26】

これは収容された犬の数を示しているものです。こちらが搬入されたの、こちらが出ていったのというふうな形で、これは大体平均値ですね。2月、3月、4月と。こちら辺ぐらいまでが、やっぱり第一の、センターとしてはピークかなと。ここから先、5月12日ぐらになりますと、先ほどのプレハブなんかできてくるということになります。それと、あくまでも我々は被災動物を救助するというので、普通の、いわゆる不要になった犬、猫ちゃんを救護するというわけではございませんので、だんだん、そういったものが減ってきたということとでございます。【スライド 26】

これは猫ちゃん、傾向としては大体おんなじような形ですね。こちら辺ぐらいまでやっぱり多くて、特にこの2月は物すごく多いんですけども、大体そういうような感じで来てるということです。【スライド 27】



【スライド 27】



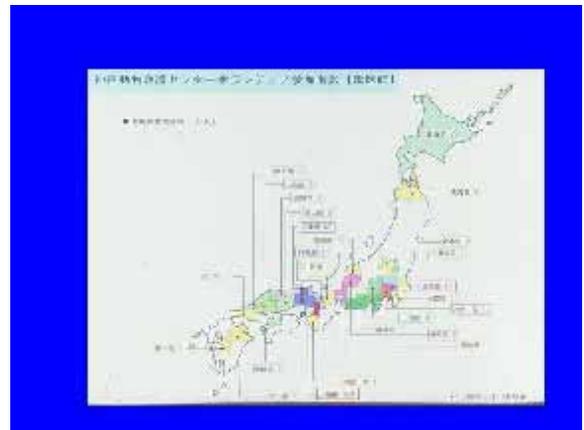
【スライド 28】

これはセンターの診療頭数ですけれども、当然頭数が多くなればなるほど、多くなってくると。ただし、5月以降はどんどん、収容頭数も減ってきたのは事実なんですけども、こちら辺に比べて、1日に40頭も50頭も治療せないかんというふうな、そういった形のもの、ああいうプレハブなんかになって、やはりかなり落ちついてきたのかなというふうには思います。

延べで言いますと、8,000頭以上は治療したのかなということで、これなんかもそうなんですけれども、当初、神戸市獣医師会では、大体20名から30名ぐらいしか動けなかったと。あとは先ほど言った全壊、半壊で、自分たちの家、あるいは病院の処置をしなくちゃいけないということで、とても救護に携わるといようなことはできなかったんですけれども、4月ぐらいになってきますと何とか目鼻が立ってきたということで、悪いけども出てくれへんかということで、こちら辺まで来ますと、1日当たりの獣医師の数というのがそんなに多くはない、2人か3名、神戸から出ていく。あとはボランティアの先生が3人、4人おれば何とか回るようになってきましたので、お願いして、大体月に1回ぐらいの割合ということで、組んで出させていただいたんですけれども、ところが、まだ、この4月、5月になっても、道路が復旧しておりませんので、灘とか東灘という東の端っこの方

の区から来られる。普通やったら30分もあれば十分来られるんですけども、2時間以上かかると。これはもう渋滞なんですね。1時から4時まで来て診療してくださいと。1時に来ようと思ったら、2時間前やから、だから11時ごろ出ないかんのですね。ほんで、渋滞でととろしてくると。来たはええわ、ほんじゃあ、昼飯なんかどうするんだと言うたら、それは何もなしでおって、4時ぐらいに帰ると。4時に帰ればいいですけども、何かちょっと時間のかかる診察なんかがあれば、5時か、5時過ぎてくると。帰ったら7時ぐらい、あるいはそれを過ぎるんですよ。ということは、1日休んで行かないと、この当番には間に合わないというふうな状態で、なかなか言いにくかったんですけども。

当時の、何というんですか、感じというんですか、頼みますと言った場合に、いや、それはもうできへんからとか、なかなか言えないんですね。なぜかわからないんですけども、頼むと言ったら、わかりましたという形で。こちらが見ててもお気の毒だなというのもあったんですけども、頼むと言ったらわかりましたというものだから、じゃあ頼むというふうな話になってしまったというような、一種独特の震災のときの雰囲気というふうな形のもの、今考えても不思議な感じはしますけれども、実際にはそれがあったということです。【スライド 28】



【スライド 29】

これはボランティアのあれなんですけども、獣医師、あるいは獣医師学生のボランティアをあらわしてるものです。当然ながら兵庫県というか、兵庫県も神戸市も全部おんなじなんですけれども、ありがたかったのは、この横浜とか、東京とか、こちら辺の方、当初、先ほどの4月ぐらいまでなんですけれども、忙しいときに頻りに来ていただいたということで、これは非常に戦力になったと。

それと、もう一つは代診クラスですね、いわゆる副院長クラスが来てくれたと。これは非常にありがたい。なぜかと言いますと、院長クラスが来ると、うるさいんで

すね。自分のやり方というものがございまして、こうじゃないか、ああじゃないかという。神戸の先生、どうするんだなんて聞いてくれないんですね。ところが、代診クラスの先生が来ると、どうしますと聞かれるので、こうやってくれと言うと、はい、わかりましたということで、非常にやってくれてありがたかったということで、でも、もう4月までしか私はよう行かんと言うもので、ありがとうございましてということで受けて、その後になってきますと、診療頭数も減ってきました。

最後の平成8年5月いっぱいぐらいまで、1日当たり2人か1人なんですけども、あとは大阪府ですね。大阪市と大阪府と両方ございましてけれども、ここの獣医さんがずっと、いわゆる細く長く援助してくれたと。この大きな特徴ですね。忙しいときにほんと来てくれるという方、それから今度は、ある程度落ちついたんだけども、要るんですという形のときに、細く長く援助してくれたという大きな特徴があったと思います。だから、そういう点では非常にありがたく、北は北海道から南は九州までの先生方が頑張っていたということなんです。

【スライド 29】



【スライド 30】

これは普通の一般ボランティアということでございまして。意外と多かったのが兵庫県なんです。結構近くからも来てくれてるということ。ありがたいのは、長田とか兵庫とか、中央、灘、東灘の震災の多いところ。この人たちも当初は大変だったんですけども、例えば5月とか、6月とかになってきますと、手があいてきたと。お世話になったんだから、じゃあ、私らもちょっと1週間ぐらいですけども、お手伝いさせてもらえますというふうな形で来ていただいたり、あるいは世話になったから、何かすることないですかと。例えば大工さん。私、大工やけど、何かすることないですかと、大変ほんなら、ここの辺の屋根つくってくれとか、何かつくってくれというふうな形だとか、あるいは長野県の方から来られて、人間の方の避難所なんかには電気工事とかそんななされ

て、何か動物のがあると言うから、何か不便してないかなということに来てくれたと。ちょうどボランティアさんなんか、テレビが映るやら、映らんやらというようなことがあった、あるいは電気洗濯機でやってると、何かすぐ電気が飛んじゃうんだとかいうふうな、そういう話、もう本職ですから、ああ、わかった、わかったということで、さっとやってくれて、1日ぐらいで非常に手際よくやってくれたということで、そういう点も非常にありがたかったということですね。意外と兵庫県だと、近くの大阪とかというのも意外と来てくれてるというふうには思いました。【スライド 30】



【スライド 31】

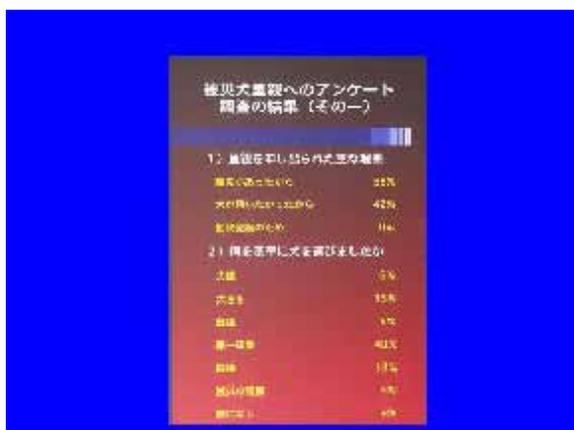
これは犬の引き取りの方です。多くはこちら、やっぱり北海道から九州までということで、意外と兵庫県で結構見ると、多いんですね、これ。420頭ぐらいですか、ぐらいとかというのはすごいですね。だから、意外と世話しに来て、それで気に入った犬がおったら、それをくださいとかというふうな方もかなりおられたということです。それから、特徴的に言うのは、犬猫を1頭も安楽死せんともらってもらうということでやったんですけども、いまだに覚えてる犬がおって、それはもう本当に何と言うのか、こんな犬、どうやってかごというか、おりの中に入れてのかなという、もうオオカミみたいな犬で、何と言うかな、うなり声かうとか、すうとかじゃないんですね、腹の底からぐうというような、何だあれはというような形で、それは飼おうとか、そういうレベルじゃないんですね。これを東京の愛護団体に1匹だけという条件つきで送って、安楽死せんと飼ってくれということで引き受けてもらったというのが、あの犬は本当にすごかったですね。だから、普通の犬が何か世話しようと思って、ううと言って怒ったという、そんなレベルじゃなかったと思うんですけど、そういうふうなものもあつたし。ちょうど我々が1月27日ぐらいにオープンした、その当時に神戸市内で、やっぱり飼い主さんなんか、家もつぶれて焼けてしまったと。もう、どこ

も行くあれもなし、動物を連れていけないと。ほんなら、かわいそうやけども安楽死してくれということ、動物病院に行って、安楽死をして。そういうテレビがぼんと映ったということで、それはもう、すごく批判を受けて、おまえのともやっとなのかと。たまたま動物管理センターという場所柄があんまりよくないんですね。だから、違うんです。震災なので、引き取りとか、そんなのは一切やめてるだけどもと言うても言うても、それが、そういったことをやっていると、なかなか信用されなかったというつらい思いもございました。【スライド 31】



【スライド 32】

そういうふうな中で、猫ちゃん。猫ちゃんになると、やっぱり範囲は狭いのかなと思いますけれども、やはりおなじような傾向で、結構、地元というのが多く引き取っていただいたのかなと思います。【スライド 32】



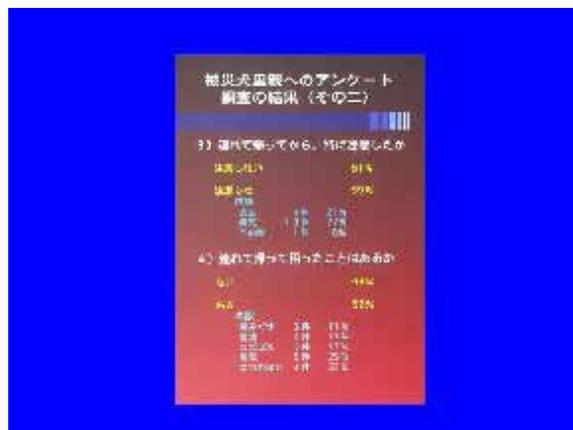
【スライド 33】

これはアンケートの結果でございますけれども、何で里親に申し出られたんですかと言うと、こういうふうな震災があったからとか、犬飼いたい、こういうのがたまたまあったということで、でも、6割近くは震災のためということで、何を基準にしましたかと言ったら、こういう感じですね、第一印象と。目が合うとか、寄ってきたとか、何かそういうものが一番よかったんだろうというふうには思います。【スライド 33】

帰られてから、何か注意することはと言うと、6割の

人はないと。でも、注意したというのは、逃げちゃったとか、病気だとかいうような形のもの。特にさっきの病気のことでなんですけれども、やはり病気になったときに治療しようと言っても、なかなかできない犬。診察台に上げようとしても、かまれたとか。診察台に上げてするんだけど、かわいそうだからと言ってなでてあげたりなんかしようとする、ぼこっとかまれるとかという、そういうふうなトラブルがあったので、どんな飼い方をしていたのかということを知ってほしいというふうな形のもの、こういうところで、あれば役に立つというふうなことだと思います。

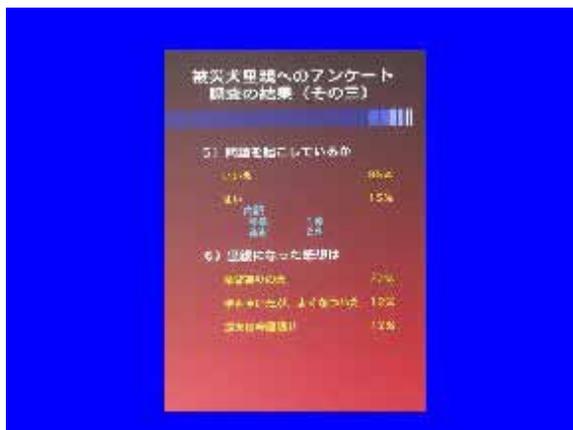
困ったことという、やっぱりあるという、半分ぐらいはこういうふうなむだばえやとか、排せつだとか、いろんなことがあるんですけども、やっぱり病気というのはいくらあるのかなと。当初、やはりわざわざ、例えば年いって、もうよばよばしてて、あるいは何かこう、ちょっとやせててという、そういう人、そういうのをもらいますというふうに来られた方もちょこちょこおられたんですね。ぱっと見て、ああ、こんなかわいいのは、もうほっとしたってもらえる。私は嫌やけども、年寄りの犬だとか、何かそういった障害のある犬をやろうと思って来ましたというふうな、そういうふうな方もあったので、そういうふうな方もあって、これぐらいの感じのかなというふうには思います。【スライド 34】



【スライド 34】

それから、問題を起こしているかと。感じとしては、こういう 85%がないというふうな結果で、えっという感じはしたんですけどもね。それから、やはり、ただ希望どおりが 77%、今回限りというのが 12%ぐらいあるということで、やはり我々が思ったよりかはいいのかなと。成犬譲渡というのはまるきりあかんのかなと思ってたけど、8割近い確率でよくなったのかなというふうには思います。【スライド 35】

これは終わりの方ですけども、常陸宮御夫妻が激励のためにわざわざおいでいただいたということです。



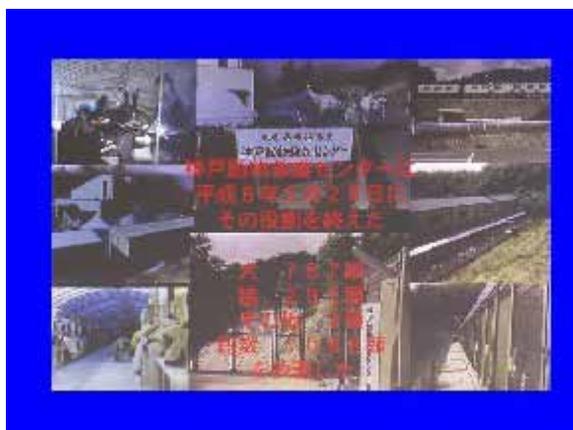
【スライド 35】



【スライド 36】



【スライド 37】



【スライド 38】

ちょうど、ここにも子犬をだっこされておってという

ことで、持って帰っていただいたということです。

それから、これは旗谷先生、これはウインドブレーカーなんですけれども、こういうデザインをして、我々も、どう言うんですか、救護ばっかし、寄附金ばっかしをもらっていては申しわけないということで、長田にある障害者なんかの団体が、こういうものとか、シャツとか、そういうのをつくってるといことなので、じゃあ、こういうものをつかって販売して、それを運営資金に充てようやないかというふうな形で、ウインドブレーカー、白とか、こういうブルーだとかというふうな形のものを つくって、皆さんに応援をお願いしたということです。

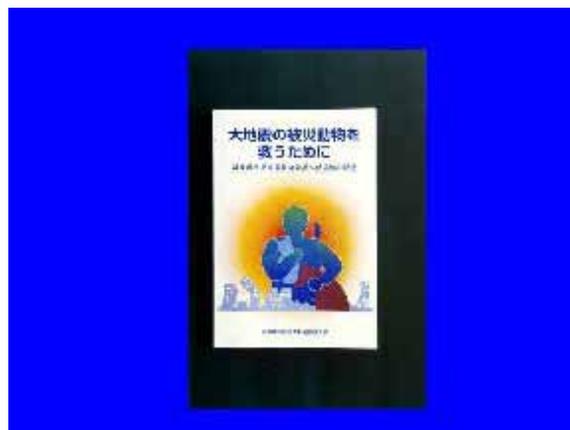
【スライド 36】

それから、当然のことながら、里親募集ですね。特に愛護週間のときなんかは、これは姫路のものですけども、淡路、それから豊岡、日本海の方ですね、だとか、あっちこっち、そういうのがあると聞いたら、ボランティアさんが犬猫を連れて走り回ってくれたということでございます。【スライド 37】

それで、この5月29日に閉鎖ということでございます。これは先ほどのプレハブ、シェルターを、ビニールハウスをつくってるところ。これは暖をとって、なるべく寒くないように、こういうような毛布や何やかんやで覆ってるといことなので、これは神戸だけですけれども、これぐらいの頭数ということで、全部合わせて、三田と合わせまして、1,556頭という動物を救護したということでございます。

そういったことをまとめたのが、この本でございます。あしたも来られると思うんですけども、麻布大学の太田先生がチーフになって、これをまとめていただいたということで、また、ブエノスアイレスであった世界獣医大会のときにも、そこで発表していただいたということでございます。これで終わりですかね。

以上が、15年前の動物救護の概略でございます。どうもありがとうございます。



【スライド 39】